

St. Luke's International University Repository

Developing a Community Where People can Talk Naturally about the Body through the “Knowing Your Body” Program by Daycare Teachers for 5—6 Year Children

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬戸山, 陽子, 村松, 純子, 大久保, 暢子, 三宅, 美千代, Setoyama, Yoko, Muramatsu, Junko, Okubo, Nobuko, Miyake, Michiyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016516

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



保育士による5～6歳児向け「体のお話会」実施を通じた 日常的に体のことが話題になるコミュニティの形成

瀬戸山陽子¹⁾, 村松 純子²⁾, 大久保暢子³⁾, 三宅美千代⁴⁾

抄 録

目的：保育士が5～6歳児に対して定期的に「体のお話会」を実施することが、日常的に体のことが話題になるコミュニティの形成につながるプロセスを記述することを目的とした。

方法：本研究は、参加型研究の手法を用いた。都内のA保育園で年中・年長児を対象に「体のお話会」を保育士が3回行い、その後の子どもの変化等について、保護者および保育士にメールと対面のインタビューでたずねた。インタビューの逐語録からサブカテゴリー、カテゴリーを作成し、その後、カテゴリー間の関係を分析した。

結果：研究協力者は「体のお話会」に参加した園児23人、保護者8人、保育士4人であった。保育士によるお話会の子どもへの影響では、【体の仕組みや正常異常を理解する】【体の大切さを理解する】【体への興味関心を示す】【健康的な生活行動を理解し行動する】【親きょうだい保育士に体のことを積極的に伝える】の5カテゴリーが抽出された。また保護者への影響では、【体の知識を得る】【子どもの健康を体の知識とつなげる】【家庭で体のことを話題にする】【子どもが体を学ぶ意義を感じる】等の6カテゴリー、保育士への影響では、【体の知識を得る】【子どもに体を教える役割に前向きになる】【体の話の振り返りや次への改善・提案をする】などの5カテゴリーが抽出された。カテゴリー間の関係性を分析したところ、保育士が「体のお話会」を行うことが、子どもと保護者、保育士自身にさまざまな影響をもたらし、その後、コミュニティ形成につながっていた。コミュニティ形成には保育士の役割が大きいことが考えられた。

結論：保育の専門職である保育士が5～6歳児に対して定期的に「体のお話会」を実施することで、子どもが家庭で体の話をし、保育士も園で繰り返し体のことを話題にするなど、日常的に体のことが話題になるコミュニティにつながるプロセスが示された。

キーワード：ヘルスリテラシー、保育園、5～6歳児、体のお話会、コミュニティ参加型研究

I. 緒 言

ヘルスリテラシー (health literacy ; HL) とは、健康医療情報にアクセスし、理解・評価し、活用する力である (Sorensen et al., 2015)。HLが高いことは健康増進の資源であり (Nutbeam, 2008)、市民全体のHL向上は、幼少期からの課題である (Velardo, et al., 2016)。HLの一要素である「科学的リテラシー」(Zarcadoolas et al., 2006)には、体に関する基本的な知識が含まれる。しかし日本の義務教育では、たとえば小学校6年生の理科に「人の体のつくりと働き」という内容はあるが、「呼吸

「消化」「血液の循環」を他の動物と比較をするものであり、自分の体を体系的に知る機会が限られてきた (文部科学省, 2017)。海外と比べても、日本における体や健康教育が時間や内容面から十分でない可能性が指摘される (藤田, 2013)。人は体の基本的な知識をもって、体のすばらしさを知ることにより、命や日常生活の大切さを理解し、健康を守る日常生活を構築して、保健行動における「市民の主体性」を発揮できる (菱沼ら, 2006)。これらより、幼少期から体を体系的に学ぶ機会は重要である。

このような状況からわれわれは、市民が体の知識を持ちHLを向上するため、5～6歳児を対象に「体のお話会」を開始した (菱沼ら, 2006)。子どもが体を学ぶ主要教材は、「消化器系」「循環器系」「泌尿器系」「呼吸器系」「神経系」「生殖器系」「骨と筋肉」の7系統 (のちに「肝臓と脾臓」を追加し、現在は全8系統)の紙芝居と絵本とし、保育園や幼稚園で実際に使用しながら改良を重ね

受付日：2020年5月28日 受理日：2020年12月18日

1) 東京医科大学教育 IR センター

2) Baby in Me

3) 聖路加国際大学大学院看護学研究科

4) つくば国際短期大学保育科

てきた(後藤ら, 2008)。これまで「体のお話会」に参加した子どもは、「体の仕組み」や「日常生活の大切さ」を理解し、「健康を守る日常生活行動の構築」を行っていた。さらに子どもが自宅で体について親に話すことで、親もまた「体へ興味関心」をもち、「体への仕組みの理解」が進んでいた(大久保ら, 2008; 瀬戸山ら, 2017)。

しかしこれまでの「体のお話会」には、2点の課題があった。1つは、研究者が保育園や地域図書館に向かうアウトリーチ方式で、体のことが子どもにとって非日常のイベントになってしまっていたことである。2つ目は、「体のお話会」の実施者が保健医療関係の研究者で、子どもの専門職ではなく、目の前の子どもに対する臨機応変なかわりには限界があったことである。これらから、実施内容や手法が現場に適するように community based participatory research (以下, CBPR) の手法を用いる必要があると考えられた。CBPR とは、初期段階からコミュニティメンバーと協働し各メンバーの役割や影響に力点を置いた方法で (O'Fallon et al., 2002), 本研究のコミュニティメンバーは、子どもと保育士、保護者である。本研究は、研究者らがこれまでの課題を保育士と保護者に共有し、保育士による定期的な「体のお話会」実施を提案するところまでは研究者主導である。しかし、具体的なお話会の内容や計画の検討、保護者への説明やヒアリングの計画は、一貫して現場の保育士と研究者が協働し、この過程を参加型研究の手法で行うこととした。また保護者に対しても、保育士が「体のお話会」を行うことに対する意見や感想等を積極的にだしてほしいと依頼した。

子どもが日常で長時間過ごす場で、日々子どもとかわる保育の専門職が定期的に「体のお話会」を実施すれば、子どもが親やきょうだいに体の話をしつつ、保育士とも体について話す状況が継続され、子どもを中心に日常的に体が話題になるコミュニティが形成されることが考えられる。以上を踏まえ本研究は、保育士が5～6歳児に対して定期的に「体のお話会」を実施することが、日常的に体のことが話題になるコミュニティの形成につながるプロセスを記述することを目的とした。

II. 研究方法

1. フィールドとお話会の年間スケジュール

フィールドは、2016年と2017年の2年間、研究者主導で「体のお話会」を実施した都内の私立 A 保育園であった。本研究においては2018年4月より準備を重ね、5月からの3か月間、1か月に1プログラム(45分/回)を実施した。内容は、園の保育士の意見から、「たべたもののおりみち(消化器系)」「おしっこのはなし(泌尿器系)」「ちとしんぞう(循環器系)」の3系統とした。お話会に用いた紙芝居は1系統8枚の絵で、たとえば消化器系は、子どもがリンゴを食べて飲み込んだ後、胃の「プー

ル」で溶かされ、小腸で栄養が、大腸で水が吸収されて、最後には便として排出される一連の流れが描かれている。お話会の実施者は保育士であり、参加者は年長児と年中児であった。園児には各お話会終了後に、紙芝居と同じ内容の絵本を持ち帰ってもらった。全8系統あるうち今回お話会を行わなかった5系統の絵本は、10月にまとめて配布した。

2. 研究参加者

研究参加者は、コミュニティメンバーである「体のお話会」に参加した年長・年中園児と、お話会を実施した保育士、お話会に参加した子どもの保護者であった。「体のお話会」は園の行事として該当年児全員に対して行ったが、保育士と保護者に関しては、本研究への協力を承諾した者が研究参加者となった。保育士の参加者は、お話会の企画・実施を行い、保護者の参加者は、子どもに体の話をする取り組みへの意見や感想を伝える形で研究に参加した。

3. データ収集

保育士および保護者に、5～7月の各お話会終了直後に、「子どもが体のお話会のことを家で(保育士には「保育園で」)話したか」「話したことはどのようなことだったか」「お話会のあと、子どもになにか変化はあったか」「お話会後に渡した絵本は読んでいるか? 親子で、子どもひとりなど、どのように読んでいるか(保護者のみ)」「その他、感想や気づいたこと」という5点についてメールインタビューを行った。全3回のお話会終了後、メールインタビューの回答に基づき、より詳しい内容や、保育士自身、保護者自身の変化や影響に関して、対面インタビューでたずねた。対面インタビューは8、9月中であった。

4. 分析方法

メールおよび対面インタビューの逐語録を「お話し会が(子ども、保育士、保護者に)与える影響」に関して意味がとれる単位で切片化し、内容の類似性からグループを作成して、各グループに内容を表すサブカテゴリー名をつけた。次にサブカテゴリー同士との類似性を検討して、上位の【カテゴリー】を作成した。カテゴリー作成には、基本的に切片からカテゴリーを作成する帰納的手法を用いたが、同時に大久保ら(2008)が子どもに体を伝える取り組みの評価指標として作成したアウトカムモデルの「からだの仕組みの理解」「日常生活の大切さの理解」「健康を守る日常生活行動の構築」といったカテゴリーを参考にした。【カテゴリー】とサブカテゴリー作成後、保育士が子どもに対して定期的に「体のお話会」を実施することが「日常的に体のことが話題になるコミュニティ形成」にどのようにつながるかを示すため、カテゴリー間の相互関係を分析した。分析結果

表1 研究協力者の保護者および保育士の属性

協力者	年代	性別	園児	保育士 経験年数	児のきょうだい	インタビュー 時間 (分)	備考
A	保護者	40代	女性	年長・男児	弟・3歳	27	
B	保護者	30代	女性	年長・男児	弟・2歳	35	
C	保護者	40代	男性	年長・男児	姉・8歳	33	
D	保護者	40代	女性	年長・男児	弟・2歳	34	
E	保護者	40代	女性	年長・男児	弟・3歳	26	
F	保護者	30代	女性	年中・女児	なし	29	
G	保護者	30代	女性	年中・男児	妹・4歳, 1歳	28	1回目(消化器系)のメール回答なし
H	保護者	40代	女性	年長・女児	妹・2歳	29	1回目(消化器系)不参加
I	保育士	20代	女性	6年		30	2回目(泌尿器系)不参加
J	保育士	20代	女性	5年		31	
K	保育士	40代	女性	21年		33	
L	保育士	20代	女性	3年		34	2回目(泌尿器系)のみ参加

については、研究メンバー内で共有し妥当性の確認を得た。

5. 倫理的配慮

はじめにA園の責任者に研究実施の承諾を得て、話し合いの結果、お話会はA園の行事として実施することとした。また保育士・保護者がインタビューに応じるかどうかは自由意思とした。得られたデータは研究のみに使用し、発表の際は個人が特定されないよう配慮することを口頭および文書で説明し、文書で承諾を得た。実施に当たっては、東京医科大学医学部看護学科倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:29-7)。

Ⅲ. 結 果

1. 研究の参加者

お話会には、年中(男児7人、女児3人、計10人)、年長(男児8人、女児5人、計13人)の合計23人が参加した。メールおよび対面インタビューに関しては、参加を呼び掛けた23人の保護者のうち8人と、年中・年長児を担当する保育士4人が参加した(表1)。

2. 「体のお話会」の子どもへの影響

データの切片化とカテゴリー化を行うなかで、①子ども、②保護者、③保育士のそれぞれに関する内容がでてきたため、3者を分けてカテゴリー化した。本文中の【】はカテゴリー、<>はサブカテゴリー、「」は生データである。お話会実施による子どもへの影響では、【体の仕組みや正常異常を理解する】【体の大切さを理解する】【体への興味関心を示す】【健康的な生活行動を理解し行動する】【親子きょうだい保育士に体のことを伝える】というカテゴリーが見いだされ、これらは、目指すコミュニティ形成までのプロセスを表す現象であった(表2)。表には、代表的な切片を記した(以下同様)。

【体の仕組みの正常異常を理解する】は、<個別の臓器の名前や形態、機能を言う><系統の一連の流れを言う><体の正常や異常を言う>から構成された。<個別の臓器の名前や形態、機能を言う>は、「腎臓が握りこぶしぐらいなんだよと教えてくれました」「ねえ、十二指腸って知ってる? など驚くような言葉を言っていました」等で構成され、<系統の一連の流れを言う>は「消化器系のお話について聞いてきたことを教えてくれました。食べ物が入って口から食道を通り→胃でドロドロに溶かされ→十二指腸→小腸→大腸→そして最終的には肛門からうんちとなって出て行くところまで正確に教えてくれました」等で構成された。また<体の正常や異常を言う>では、「(おしっこは)1日、1リットル、牛乳パックぐらいはおしっこ出るんだよ〜とかって話をしてました」等が含まれた。

3. 「体のお話会」の保護者への影響

保護者に対する影響では、【体の知識を得る】【子どもの健康を体の知識とつなげる】【家庭で体のことを話題にする】【子どもが体を学ぶ意義を感じる】【子どもが体を学ぶ教材や内容への要望を抱く】【体の話をする難しさを感じる】というカテゴリーが見いだされた(表3)。

【子どもの健康を体の知識とつなげる】は、<子どもの体調不良に体の知識が役立つ><子どもの習慣を体の視点から考える>から構成された。<子どもの体調不良に体の知識が役立つ>では、「(略)ヘルパンギーナって、それであまり飲んでくれなかったのが心配だったんですけど、おしっこはそんなに濃くはなってなかった。水分とれてたんだなと思って、役に立ちました」病気がったり、腎盂炎だったりとかそういうときに(体の知識が)すごく役に立っていて、ありがたかったですから構成された。<子どもの習慣を体の視点から考える>では、「お肉が苦手で、しかも味じゃないみたいで。(中略)ひき肉は食べるんです。噛むことが関係してるのかなっ

表2 「体のお話会」実施による子どもへの影響

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
体の仕組みや正常異常を理解する	個別の臓器の名前や形態、機能を言う	腎臓が握りこぶしぐらいなんだよと教えてくれました。握りこぶしがすごく印象に残っているみたいです。(A・メール) ねえ、十二指腸って知ってる？ など驚くような言葉を言っていました。(B・メール) (背中握りこぶしを当てて)「ここに腎臓があってね、腎臓で色々分けてね、余分なものだけ出るんだよ〜」とか。(D・対面)
	系統の一連の流れを言う	消化器系のお話について聞いてきたことを教えてくれました。食べ物口から食道を通り→胃でドロドロに溶かされ→十二指腸→小腸→大腸→そして最終的には肛門からうんちとなって出て行くところまで正確に教えてくれました。(C・メール) いままではひとまとめに「おなか」と言っていました。胃、大腸などパーツごとに分かれているということがわかったようです。息子は便秘気味なのですが、お腹が痛そうなときに「お腹マッサージしたら？」と言うと、「大腸のところね！」と返事がありました。(D・メール)
	体の正常や異常を言う	(おしっこは) 1日、1リットル、牛乳パックぐらいはおしっこ出るんだよ〜とやって話をしました。(B・メール) おしっこは色の話をしたんです。汗をいっぱいかくと、おしっこの色が濃くなるみたいなお話。(H・対面)
体の大切さを理解する	体が大切だと言う	心臓ってドキドキしてるよねー大事なんだよねーと言っていた。(J・メール) 脳みそは豆腐ぐらいの硬さだから、頭は大事にしないといけないんだよ、とか。(C・対面)
	体について真剣に話す	年齢的に、特に男の子に多いですがおしっこやうんち、おしり！ 等の言葉に面白さを感じておふざけしながら言うことがあります。体について学ぶうちにけっこう真剣で、自分の体に興味をもって、面白い言葉ではないのかも知れないと、気づいていくのかなと思いました。(J・メール) 血と心臓より、脳の方が印象的だったようで、喧嘩にて、頭を叩こうとする子がいると、真剣に、お豆腐が入ってるからだめだよ！ と言う子がいました。(I・メール)
体への興味関心を示す	自分に起きていることを体に関連させて表現する	トイレに行きたくなると、小の場合、大の場合それぞれで「いま、腎臓(大腸)ががんばってるからねえ」と言いながらトイレへ向かうようになりました。(D・メール) 後日、給食の時間には、子どもたちの会話のなかで、「胃のなかにご飯が入っていくんだよね〜」と話をしている子もいました。(I・メール)
	周囲の人の体に興味関心を示す	私の方にベタッと甘えてくるときに、「ママの凄いや心臓速いよ！」って聞いてるんですよ。ここで、「ドクドクいってるねえ」というのは3日ぐらい前にやりました。(中略)(7月最後の週)1か月ぐらいは人の心臓を聞くブームみたいのがあって、パパの心臓、とか弟のとかいろいろここに当ててみたりして。(D・対面) 私がこうして(手を背中に当てて)なんとなく押さえていたら「どうしたの？」って(園児が)言ってくれたので、説明したんです。「ここ痛くて」って言ったら、「ここってさ〜、この拳一個の、何だっけ？ 腎臓だっけ？」っていうのはこの前言ってました。(J・対面) 私がトイレに行くと、「ママ、おしっこ見せて！」と見に来て、「うん、オッケー」と(笑)(F・メール)
	望ましい生活や行動について言う	「おしっこは我慢しちゃだめ！」(と子どもが教えてくれる)(B・メール) 牛乳飲んだら骨になるから、カルシウムとらなきゃいけないとかは聞いたから分かって、朝はチーズかヨーグルトか牛乳どれかだしてね、とか、牛乳飲むとカルシウムとれるから、骨丈夫にしないとイケないでしょ、とか。(H・対面)
健康的な生活行動を理解し行動する	いつも違う様子を見せる	姿勢を正して座りましょうという場面のときに、臓器Tシャツの裏の骨の図を思い出して、まっすぐ座っていた。(J・メール) (給食のとき)いつもよりよく噛んで食べていた。(J・メール)
	苦手なこともチャレンジする	あまり水やお茶が好きではなかった息子がおしっこをつくるためによく水分をとるようになった。腎臓が泣いてるから水飲んでって。(G・メール)
	親子ようだい保育士に体のことを積極的に伝える	(弟が) 転んで血が出たときに「血が〜」って騒いでるときに、心臓の話をとうとうしていました。「血はね、心臓が一生懸命送り出しているね、あちこち行ってるんだよ。それがないと〇くんは生きてられないんだよ」とかって、一生懸命言っていました。(E・対面) 先日会のこと、保育園のお迎えのときに先生にもお聞きしたこともありましてどんな内容だったの？ 教えてよ」「また『体会』やってよ」と言ったら、大はりきりで画用紙にいろいろ絵を描いて準備してくれました。(E・メール)
伝えられてうれしい様子を見せる	自分の言葉で言い換える・例える	血は兵隊で、心臓が王様、と言っていました。お話会にできたのでしょうか。なんで血は兵隊なの？ と聞くと、「体のいろんなところ(指で全身を指しながら)を行ったり来たりするから！」と言っていました(A・メール) 昨年の会の後(だと思います、後からわかったのですが)、急に家で「これから『魚のからだ会』をやります」と言い始め、自分で描いた魚の内臓の絵をもって、口から食べて内臓通って、ひととおり、自分なりに説明したことがありました。(E・メール)
	伝えられてうれしい様子を見せる	おしっこの話がいちばんインパクトあったみたいで、その日忘れもしないのが、スーパーに入ったんです。そうしたらウイスキーが並んでるところを指差して、「あれは悪いおしっこの色だよ。これはいいおしっこだよ」って得意げで、たしかにうまい具合に、ちょっと赤っぽいのか黄色いのかならんで(笑)(C・対面) 食事のときに、いま〇くんが食べたのはどこにありますか？ 食道にあります。みたいな。「いま胃に来たよ〜」とか。ことあるごとに思い出したように、なんども繰り返して(C・対面) (絵本は) いっしょに読みました。絵本を指差しながら、こうやってこうやって、行くんだよ、と説明してくれました。次はね……と内容を暗記しているように話をしていました。(A・メール)

メールの漢字や表記は意味を変えない範囲で統一した(例:「子供」「子ども」は「子ども」に統一)。
各セグメント後のアルファベットは参加者を、「メール」もしくは「対面」は、インタビューの方法を表す。

て、お話会のこと聞いて思って」が含まれた。

4. 「体のお話会」の保育士への影響

保育士への影響では、【体の知識を得る】【子どもに体を教える役割に前向きになる】【体の話の振り返りや次への改善・提案をする】【園で体のことを話題にする】【体の話をする難しさを感じる】というカテゴリーが見いだされた(表4)。

【子どもに体を教える役割に前向きになる】は、<子ども

のために体の知識を得ようとする><体の話をする>ことに自信をもつ><保育士が体の話をする意義を話す><今後の体の話に意欲を示す>から構成された。<子どものために体の知識を得ようとする>は、「もともとの持っている知識じゃないところもあるので、そこでしっかり覚えなきゃ、理解しなきゃな」というところはありますよね」「臓器とかが、もう少し勉強しないと間違っただけを伝えてもあれなんで」が含まれ、<体の話をする>ことに自信をもつ>には、「(自分たちだけで「体のお話会」

表3 「体のお話し会」の保護者に対する影響

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
体の知識を得る	臓器の大きさや形を知る	小腸の長さが、両手を広げ子ども3人分ほどということ。(F・メール) 腎臓の大きさ(G・メール) 心臓の大きさ(H・メール)
	体の仕組みや正常な状態を知る	おしっこはいらぬものなのだというのはなんとなくわかっていましたが、もともとは血液で、それがいるものといらぬものに別れるというのは初めて知りました。(A・メール) (尿が)1日牛乳パック1本分も出ているとは思いませんでした、意外と多い。(C・メール) 1分間の血液の移動量です。(H・メール)
	改めて知識を確認する	小腸で栄養を渡すところ、あ、そうだったんだーと思出すようなことがありました。(B・メール) 概要は知っていても、具体的な大きさ・長さ等は認識していないことも多く、興味深かったです。(E・メール)
子どもの健康を体の知識とつなげる	子どもの体調不良に体の知識が役立つ	ヘルパンギーナだったかな。保育園を何日か休んだときに、じゃあそのとき、色変わるかなって私も娘のを見たんですけど、そのときは全然ものが食べられなくて栄養とれなくて、夏の暑いときだったので、水分だけはとらせて、でも水分も痛んで、ヘルパンギーナって、それであまり飲んでくれなかったの心配だったんですけど、おしっこはそんなに濃くはなっていなかった。水分とれてたんだなと思って、役に立ちました。(F・対面) 病気がったり、腎盂炎がたりとかそういうときに(体の知識が)すごく役に立っていて、ありがたかったです。(G・対面)
	子どもの習慣を体の視点から考える	お肉が苦手、しかも味じゃないみたいで。(中略)ひき肉は食べるんです。噛むことが関係してるのかなって、お話し会のこと聞いて思っ。(D・対面)
家庭で体のことを話題にする	健康のために体の仕組みを伝える	「食べないから大きくなんないんだよ」とか、食が細いから、で、いまも身長があまり大きくないから。(B・対面) お兄ちゃんが便秘すぎて、胃があって、溶けたやつがいま、大腸にいるでしょいるでしょって、その話は理解していたんですよ、多分。消化器系の話を聞いてたので、大腸のところにおい、うんこがいっぱい詰まってるんだけども、水飲まないってウチでないから、水を一生懸命飲みなさいと。(G・対面)
	けがしたときに体の仕組みを話題にする	鼻血がでた際に「どうしてこんなところまで血が来てるんだろうね」と、体の話し会で聞いたんじゃないの? というところまで来なくていいのに」といながら、「体の隅々まで血液が来ていないと生きていられないんだよ」と伝えたら、納得しているようでした。(E・メール)
子どもが体を学ぶ意義を感じる	よい行動の根拠を伝えられる	血になるから食べて……血になって筋肉になって、じゃあその後、だから運動ができるとか目がよくなるとか、もうひとつ先を言えるともう少し食べてくれるんじゃないかと……。(A・対面) こういうことをやっていたら、暴力じゃないですけど、こういうことをされたら痛い、とか、そういうことすると、相手の叩かれた部位にこういうもの(臓器)があるとか、彼らはわかるみたい。(D・対面)
	子どもが自分の体や他人、動物を知るの大切だと感じる	(体を学ぶのは)とても大切なことだと思います。自分はどうか、動物はどうか興味をもつことは大切だと思います。(B・メール) (体を学ぶのは)非常に大切なことだと思います。体を知ることで、自分も相手も大切に出来るようになると思います。(D・メール)
子どもが体を学ぶ教材や内容への要望を抱く	扱ってほしい内容を言う	大きくなって体が成長していくのがイメージできると、もっとよく食べてくれるのかなとか、そこで運動していかないと、大きくなっていかないとわかると、もっと動かなとか。(A・対面) 「なんで寝なきゃならぬかわからないから、楽しく遊んでいたい遊んでいたい、起きての方が楽しいから……ってなかなか寝ないという話はちらほら、だからなんで寝るのかとか朝のリズムの話があると確かにいいのかもしれない。(B・対面) 特に女の子は、なぜ自分の体を大事にしないといけないのかとか、早い段階で知った方がよいのかなと思う。日本はそういう遅れてるから、そういうのがあった方がよいのかなと。(C・対面)
	プログラムや教材への要望を言う	今回の話しは食べ物から栄養を吸収することでしたが、栄養をとらぬとどうなっちゃうのか、というところを少し加えてもらえる、より子どもの印象に残るかなと思いました。以前、子どもに質問されたことがあるので……。(A・メール) ページごとのポイントを文章のうえに記載してもらえともっとわかりやすいです。読む時間がないときは多分そっだけ読みます。(A・メール)
	別の場でも体の話を希望する	図書館とか、社会教育会館とか、まあそういう公共の施設ですね。レストラン貸切とかよりは居心地はいいのかな……。(C・対面) 上の子だけならいいんですけど、下の子を連れて行っても大丈夫な所が(体の話を聞く場所としては)ありがたいうのはありますね。(E・対面)
体の話をしづらさを感じる	伝えにくい内容がある	(性の話は)どううまく伝えたらいいかと、自分たちが子どものときにも、ちゃんと教えてもらった記憶がなくて、学校の保健の授業でざらっとやったぐらいで。(C・対面) 3歳ぐらいのときなんですけど、女の子のおしっこがどこからでてくるかにもすごい興味津々だったときがあって。(中略)男の子だからなのか、生殖器って中途半端にどうも言ってきあきあ騒ぐものって認識が先に来てて、それもなんとなく嫌だなと思ってて、でもどうしたらいいかは……。(E・対面)
	難解で伝えにくい	「酸素ってなあに」とか……。空気のなかに酸素が入ってて、窒素とか二酸化炭素とか、そういうのがいっぱいあるんだよ〜って、でも、そんなこと言っても、わかんないよなって思っながら。(G・対面) (睡眠について)私もそれが具体的に説明できないので、体の、寝る起きる、太陽の光が大事なんだよって言うのがうまく説明してくれたらありがたと思います。(H・対面)

メールの漢字や表記は意味を変えない範囲で統一した(例:「子供」「こども」は「子ども」に統一)。

各セグメント後のアルファベットは参加者を、「メール」もしくは「対面」は、インタビューの方法を表す。

をすることは全然難しくはないと思います。それは大丈夫です」「まだ全然ですが、何回もやると、できそうかなと思うし、慣れてきます」等が含まれた。また「保育士が体の話をしづらさを感じる」ということで、体って身近なものじゃないですか。身近な人が身近なことを話すっていうのは、『当たり前のことなんだよ〜』っていうのを伝えるという教育的側面から

みてもいいのかな、っていうのは思っました」「(略)(子どもの)個性とかを知っているとやっぱり(いいと思う)」等が含まれた。

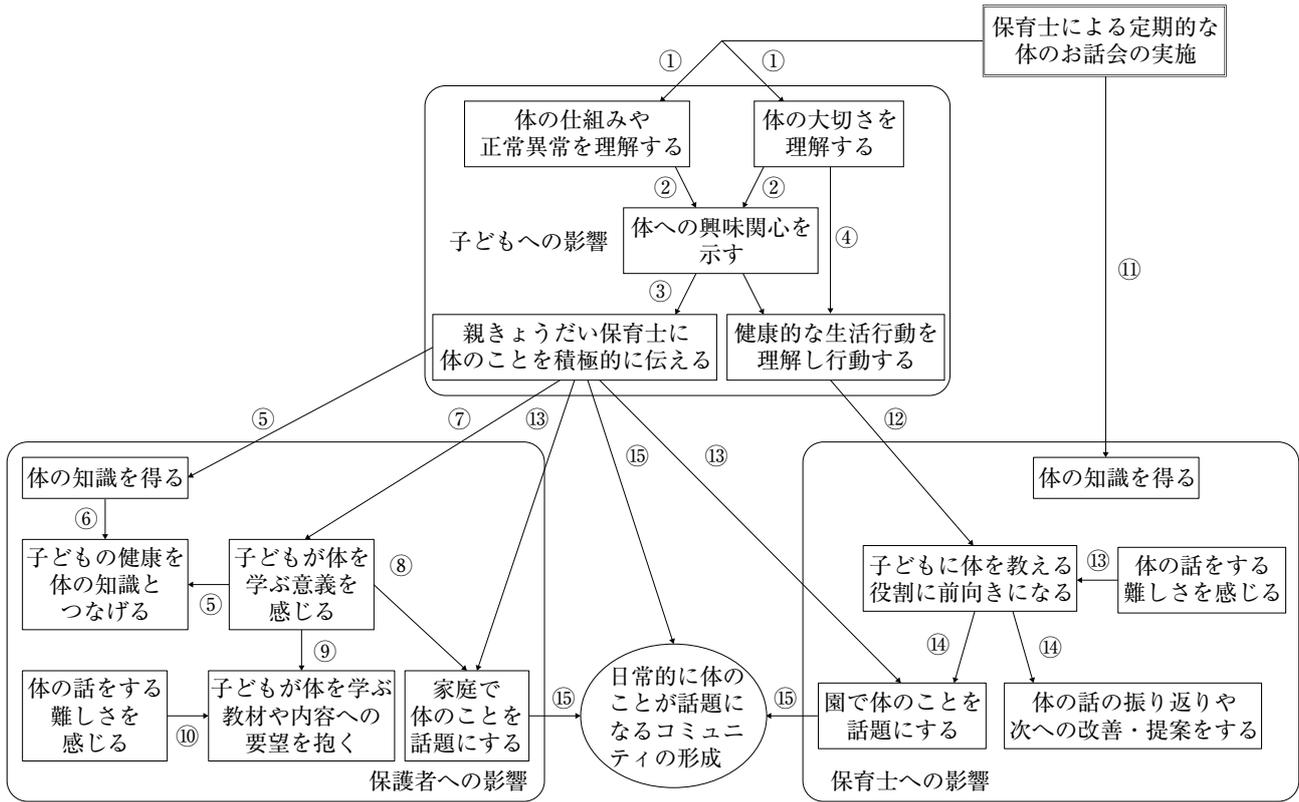
【体の話の振り返りや次への改善・提案をする】は、<取り組みを振り返る><時間に関する提案をする><方法に関する提案をする><教材に関する提案をする><子どもの理解度の評価をする><今後扱いたい内

表4 「体のお話会」の保育士に対する影響

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
体の知識を得る	臓器の位置を確認する	腎臓が背中にあることは大人でも知らない人がいそうな臓器ですが、私もそうだったと思い出した。(J・メール)
子どもに体を教える役割に前向きになる	子どものために体の知識を得ようとする	もともとのもっている知識じゃないところもあるので、そこでしっかり覚えなきゃ、理解しなきゃなというところはありますよね。(K・対面) 臓器とかが、もう少し勉強しないと間違ったことを伝えてもあれなんで。(L・対面)
体の話をすることに自信をもつ		(自分たちだけで体のお話会をすることは)全然難しくはないと思います。それは大丈夫です。(I・対面) 去年は○さん(活動時のNPO名)におまかせ、ってところがあったんですけど、今年度は、ご指導いただきながらも、自分たちがやった割合が昨年度に比べて多かったなと思うところは、自分たちにも実感としてあるんですね。自信になって。(K・対面) 構えなくてもいいし、わからなかったら「後で調べるね」とか、「本、みよう」みたいな感じに(K・対面) まだ全然ですが、何回もやると、できそうかなと思うし、慣れてきます。(L・対面) 私も大人になり、こうやって子どもたちといっしょに学ぶことを誇りに思います。(I・メール)
保育士が体の話をする意義を話す		保育士がやるということで、体って身近なものじゃないですか。身近な人が身近なことを話すっていうのは、「当たり前なことなんだよ〜」っていうのを伝えるという教育的側面からみてもいいのかな、っていうのは思いました。(K・対面) その1人ひとり興味もつところ違うけど、1人がこっち行って、あっち行ってってなると、だんだん静まって行って、ってなりますね。(子どもの)個性とかを知っているとやっぱり(いいと思う)。(J・対面)
今後の体の話に意欲を示す		次回泌尿器系の話、事前に調べておきたいと感じました。(I・メール) 今回は(お話をした系統は)3つだけど、8つ、全部やりたいなと思いました。せっかくあったので。(I・対面) 姿勢プログラムやりたいですね!(K・対面)
体の話の振り返りや次への改善・提案をする	取り組みを振り返る	汗をかくので着替えや水分補給を促す、シャワー浴なども始めて汗をかくから清潔にサッパリなどと園で声をかける時期でもあるので、おしっこのテーマはこの時期で子どもたちの興味がよりもてる時期だったように思う。(K・メール) 事前に私たち職員も、臓器について、体について勉強しておけば、子どもたちにスムーズに教えてあげられるかな? と思い、私の反省です。(I・メール) 心臓の仕組みの話は、音を聞くとか脈を子どもたちに知らせたのはよかったが、仕組みのしかけをもう少し熟慮すればよかったと反省した。(K・メール)
	時間に関する提案をする	結構1回の量がすごく詰まっているじゃないですか。それを、もう少し細かく分けたら……。 (I・対面) 集中力がそんなにやっぱりまだ4〜5歳でもたなくて、まあ、このお話会も、展開があって、これして、次はこれしてって(構成なので)、集中力もまあ(保てる)。なので楽しくもできてるんですけど……。もっとこの1回でパンってやるよりは(短く細かくした方が)よりは身につくのかなとは思いますが。(I・対面)
	方法に関する提案をする	イベントとしてやるのもいいが、日常の保育のなかでからだTシャツに触れる機会があるとまた違う興味が沸くのかなと思った。(K・メール) 血の巡り方における、酸素とか、でてくるワードを事前に子どもたちに伝えておいてもよいか? と思いました。(より実感が湧き、想像、理解できるかな? と。) (I・メール)
	教材に関する提案をする	個人的には心臓からでた血が体を巡りまた戻りきれいになる循環を子どもたちに知らせる装置(工作)の機会があれば挑戦したい。(K・メール) 考えてたんですが、(血液の循環がわかる装置を)灯油の、シュボシュボ、あるじゃないですか? あれを2本さして、あれでなんかうまく行かないかな、と思うんですけどね。(K・対面)
	子どもの理解度の評価をする	心臓のなかの部屋が分かっている、というのは、難しいかなと思ったけど、絵本を見ながらどういう順番で流れて、っていうのは難しかったかと思うけど、絵本をその日に配ったときに見ると、読んでいる子が、心臓の間が空いてるのを迷路みたいにやっつてる子がいました。(J・対面) 音と、血が出てるのがあまり結びつかないのかなあと思ったんですね。なかなか、心臓の脈のドクドクの音と、この血がポンポン出てるっていうのがイメージしにくいというか、つながってないというか、そういう感じがしましたね。う〜ん。(K・対面)
	今後扱いたい内容を提案する	あと、姿勢。いまの5歳児は本当に姿勢が悪くて、ずつこう出来なくて、体育座りとか、小学校行ったらやるじゃないですか。(I・対面) 睡眠について、なかなか眠れなくて……寝る時間が遅いかなっていう子が多いと思います。(I・対面) 学年によって、その年のレベルもあるんですけど、人の気持ちを……。特に今回の5歳の代は自分主体なところがわりと強くて、メンタルというか。(L・対面)
園で体のことを話題にする	お話会のことを子どもにたずねる	私とかが「どうしたら色薄くなるんだっけ? 先生忘れちゃった」って聞くと覚えてて……。教えてくれました。子どもたちから言ってくることは少なくなっただけですけど、ちゃんと頭のなかには入ってました。(L・対面)
	下の学年に体のことを話す	私もその後、世間話程度で自分のクラス、3歳なんですけど、そこで話したりして、(中略)「いっぱい飲んだら、おしっこ薄くなるんだって〜」とかって言うと、「ええ〜」とかって言って興味津々で聞いていて。(L・対面)
体の話をする難しさを感じる	使い慣れない道具が難しいと感じる	(聴診器は)大人でも聞くのは難しいな、とは感じました。慣れなんですかね?(I・対面) (臓器Tシャツは、着ながら)自分で説明するのが難しかったです。(臓器が)真下だったので、隣にいて説明の方が、やる側はやりやすいかもしれないですね。臓器とかも、「あれ、どっちが上だっけ?」みたいなことがありました。(L・対面)
	子どもからの質問が難しいと感じる	子ども達から色々質問とか出るじゃないですか。それが私たちでは、そんなにわからないことが多いので、消化器とか内臓のこととか、どこになにがあるとかどういう仕組みとか、わからなくてすぐに答えることができなくて。(I・対面) とっさの何か、ちょっとした質問をどう関連づけて答えたらいいかがわからなくなりそうだな、っていう不安はあります。(J・対面)
	間違ったことを伝えるかもしれない不安を抱く	不安だなと思うのは、本当にこっかがちゃんと勉強して正しいことを伝えないと、違うことを伝えちゃうという不安はあります。(J・対面) 私たちは、すごく深く体のことを勉強していない、専門的に養成校で勉強していないので、子どもたちに深いところ突っ込まれたときに(困る)。(K・対面)

メールの漢字や表記は意味を変えない範囲で統一した(例:「子供」「子ども」は「子ども」に統一)。

各セグメント後のアルファベットは参加者を、「メール」もしくは「対面」は、インタビューの方法を表す。



○内の数字は、本文中の説明箇所を表す。

図1 保育士による定期的な体のお話会により、「子ども」と「保護者」「保育士」にもたらされた影響の相互関連性

容を提案する」から構成された。〈取り組みを振り返る〉では、「(略) おしっこのテーマはこの時期で子どもたちの興味がよりもてる時期だったように思う」「心臓の仕組みの話は、音を聞くとか脈を子どもたちに知らせたのはよかったが、仕組みのしかけをもう少し熟慮すればよかったと反省した」等が含まれた。〈今後扱いたい内容を提案する〉には、「あと、姿勢。いまの5歳児は本当に姿勢が悪くて、ずっとこう出来なくて。(略)や、「睡眠について。なかなか眠れなくて……寝る時間が遅いかなっていう子が多いと思います」が含まれた。

5. 子ども・保護者・保育士への影響それぞれの相互関係

「体のお話会」の子ども・保護者・保育士に対する影響に関して、抽出されたカテゴリーの相互関係を図1に示した。矢印は、1つのカテゴリーが次のカテゴリーにつながる順序を表す。まず保育士の定期的な「体のお話会」の実施で、子どもは【体の仕組みや正常異常を理解】するとともに、「大事なんだよねー」という言葉に表現されるように【体の大切さを理解】していた(矢印①)。そして知識を得て体を大事だと認識することは、自分自身や周囲の人の【体への興味関心】につながった(矢印②)。また興味関心をもったことは、繰り返し【親やきょうだい保育士に積極的に伝える】行動に表れていた(矢印③)。さらに体が大切だとわかったことで、すぐに【健康

的な生活行動を理解し行動する】という現象に至った(矢印④)。

次に子どもが一生懸命に体のことを話し、いっしょに教材絵本を読むことで、保護者自身が新たな【体の知識を得る】機会を得ていた(矢印⑤)。保護者は知識を得ることで、子どもの体調不良の際にその知識を活かすなど【子どもの健康を体の知識とつなげ】ていた(矢印⑥)。また子どもが体に興味関心をもって話し、健康的な行動をとる様子をとらえ、【子どもが体を学ぶ意義】を感じていた(矢印⑦)。そして子どもが体を学ぶ意義を感じることで、自ら【家庭で体のことを話題に】し(矢印⑧)、子どもの習慣を体の視点から考えることで、もっとこういう題材を扱ってほしい等【子どもが体を学ぶ教材や内容への要望を抱】いていた(矢印⑨)。その一方で、保護者自身がどう伝えていいかわからない話題や、保護者が難しいと感じる事柄もあり、そのような思いも、体の話への要望につながっていると思われた(矢印⑩)。

保育士に関しては、まず自ら主体となって「体のお話会」を実施することは【体の知識】を得る機会になっていた(矢印⑪)。また自らのお話会により、保護者の矢印⑦と同様に、子どもが体に興味関心もち、健康的な行動をとる様子をとらえ、【子どもに体を教える役割に前向きになる】様子が見られた(矢印⑫)。保育士らは、自分たちが体を専門的に学んでいないために生じる【体の話をする難しさ】を感じていたが、それらも〈子どもの

ために知識を得よう>としたり、難しいが「構えなくていい」といった前向きな言葉につながっていた(矢印⑬)。そのような保育士の前向きな思いは、よりよい機会のために、【振り返りや提案】や、日常生活のなかで【体のことを話題にする】に至っていた(矢印⑭)。

また、子どもが【親きょうだい保育士に体のことを積極的に伝え】ることと、保護者が【家庭で体のことを話題にする】こと、さらに保育士が【園で体のことを話題にする】ことが合わさり、「日常的に体のことが話題になるコミュニティ」がつくられていた(矢印⑮)。

IV. 考 察

本研究は、保育士が体の話をするることによる、子ども・保護者・保育士への影響と、その相互関係を分析した。お話会の子どもへの影響は、体の仕組みを理解し、日常生活の大切さを理解し行動する点で、先行研究を支持した。また保護者が初めて知る内容があった点も、先行研究に一致した(大久保ら, 2008; 瀬戸山ら, 2017)。また相互関係の分析からは、保育士による定期的な「体のお話会」は、子どもの興味関心や行動等を促進するだけでなく、子どもにもたらされた影響を通じて、保護者が、子どもが体を学ぶ意義を感じ要望をもったり、家庭で体について話題にすることにつながっていた。保育士も、体を教える役割を担う誇りやお話会の工夫・提案を口にしなが、実際に園で体のことを話題にしていた。保育士が5～6歳児に対して定期的に「体のお話会」を実施することは、以上のプロセスを経て、日常的に体のことが話題になるコミュニティの形成につながっていた。

本取り組みは「個人や地域社会にある健康問題を改善するために、市民が保健医療従事者とパートナーを組み、主体的に健康をつくる社会をめざす取り組み」(高橋ら, 2018)と定義される people-centered care を体現していた。本研究以前に行っていたアウトリーチは持続可能性に乏しかったが、コミュニティメンバーが取り組みの初期段階から参加し、現場に合った方法によって日常的に体のことが話題になるコミュニティがつくられていたため、今後取り組みが継続される可能性も高いと考えられた。

オタワ憲章では、健康は「『日常生活環境』の中で、人々によって作られるものである(World Health Organization, 1986)」とされる。保育士による定期的な「体のお話会」は、子どもを中心として日常的に体のことが話題になるコミュニティの形成をもたらし、HLの一要素である体の知識を日常的に学ぶことを通じてこのコミュニティは市民のHL向上に寄与する可能性があった。

本研究は一園のことで、協力者に男児が多いという偏りもあり、他園で同じ現象になる保証がない。コミュニティ継続の可能性はあったが、実証データは最長でお話会実施後2か月後までのものである。今後は条件が異な

る園で長期にコミュニティメンバーの状態を把握し、コミュニティ形成や継続の条件、促進要因や阻害要因を探ることが課題である。

V. 結 論

保育の専門職である保育士が5～6歳児に対して定期的に「体のお話会」を実施することは、子どもや保護者、保育士それぞれに影響を及ぼすというプロセスを経て、子どもを中心として日常的に体のことが話題になるコミュニティの形成につながっていた。

謝辞

本研究は、ユニバーサル財団2017年度研究助成(助成テーマ「子どもから大人まで、誰もが体の知識を持つコミュニティづくりとその評価」)を得て行われました。本研究の調査にご協力いただいたA園の保育士および保護者のみなさま、「体のお話会」に参加された園児のみなさまに深く御礼申し上げます。お話会実施に際しては、研究会から派生したNPO法人からだフシギのメンバーにも協力を得ました。ありがとうございました。

本研究は、第66回日本小児保健協会学術集会(2019年6月22日)、第24回聖路加看護学会学術大会(2019年9月14日)にて発表したものに加筆しています。

利益相反

本研究における利益相反はありません。

引用文献

- 藤田水穂(2013):日本およびフィンランドの小学校教科書における人体や健康に関する教育の比較. *文化看護学会誌*, 5(1): 28-34.
- 後藤桂子, 菱沼典子, 松谷美和子, 他(2008): 5～6歳児用「からだの絵本」に対する市民からの評価. *聖路加看護学会誌*, 12(2): 73-78.
- 菱沼典子, 松谷美和子, 田代順子, 他(2006): 5歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラムの作製; 市民主導の健康創りをめざした研究の過程. *聖路加看護大学紀要*, 32: 51-58.
- 文部科学省(2017): *小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編*. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_001.pdf (2020/3/21).
- Nutbeam D(2008): The evolving concept of health literacy. *Social Science & Medicine*, 67(12): 2072-2078.
- O'Fallon L, Dearth A(2002): Community-based participatory research as a tool to advance environmental health sciences. *Environmental Health Perspective*, 110: 155-159.
- 大久保暢子, 松谷美和子, 田代順子, 他(2008): 幼稚園・保育園年長児向けのプログラム「自分のからだを知ろう」に対する評価指標の検討. *聖路加看護大学紀要*, 34: 36-45.
- 瀬戸山陽子, 菱沼典子(2017): 地域図書館における子どものヘルスリテラシー向上を目指した取り組み; 年長児から

- だを教えるプログラムの実践と評価. *保育と保健*, 23(1): 94-99.
- Sørensen K., Van den Broucke S, Fullam J, et al.(2015) : Health literacy and public health : A systematic review and integration of definitions and models. *BMC Public Health*, 12 (80) : Article number : 80.
- 高橋恵子, 亀井智子, 大森純子, 他 (2018): 市民と保健医療従事者とのパートナーシップに基づく「People-Centered Care」の概念の再構築. *聖路加看護大学紀要*, 4 : 9-17.
- Velardo S, Drummond M (2016) : Emphasizing the child in child health literacy research. *Journal of Child Health Care*, 21 (1) : 5-13.
- World Health Organization (1986) : *The Ottawa Charter for Health Promotion*. [https://www.who.int/healthpromotion/conferences/previous/ottawa/en/\(2020/4/30\)](https://www.who.int/healthpromotion/conferences/previous/ottawa/en/(2020/4/30)).
- Zarcadoolas C, Pleasant AF, Greer DS (2006) : *Advancing Health Literacy : A Framework for Understanding and Action*. 45-68, JOSSEY BASS, San Francisco.

|| 英文抄録 ||

Developing a Community Where People can Talk Naturally about the Body through the “Knowing Your Body” Program by Daycare Teachers for 5-6 Year Children

Yoko Setoyama¹⁾, Junko Muramatsu²⁾, Nobuko Okubo³⁾, Michiyo Miyake⁴⁾

1) Tokyo Medical University

2) BABY in ME

3) St. Luke's International University

4) Tsukuba International Junior College

Purpose : This study aims to describe the process by which nursery teachers hold regular “Knowing Your Body” program for children aged 5 to 6 years, which leads to the formation of a community where the body is talked about on a daily basis.

Method : We adopted a participatory research method, and a nursery in Tokyo held three “Knowing Your Body” programs for the children. We then interviewed parents and nursery teachers through email and face-to-face interviews about such as the resulting changes in their children. The transcripts were categorized and analyzed for relationships between each category.

Results : Eight parents and four nursery teachers participated in the follow-up interviews. The impact of the program on the children were described into five categories : understanding how the body works and which is normal or abnormal ; understanding how important the body is ; show interest in the body ; understanding healthy lifestyles and take behaviors ; and telling parents, siblings, and nursery teachers about the body. In terms of the impact on parents, six categories were extracted, including ; the parents themselves understand the mechanism of the body, and connect the child's health and the knowledge of the body. In terms of the impact on nursery teachers, five categories were extracted, including ; the nursery teachers themselves gain the knowledge of the body, and become positive to play a role to in teaching children about the body. An analysis of the relationships between each category revealed the possibility of developing a community where they talk about their bodies in daily life.

Conclusion : When nursery teachers who specialize in childcare regularly holds “body talks” for children aged 5 to 6 years old, children talk about the body at home, and the nursery teachers also talk about bodies repeatedly. The process of formulating a community where the body is talked about on a daily basis was described.

Key words : health literacy, nursery, 5-6yrs children, knowing body, CBPR (community based participatory research)